

(4) 女子中学高等学校の運営総括

校 長 浅 里 慎 也

2022 年度年間聖句

「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。わたしは荒れ野に道を敷き砂漠に大河を流れさせる。」 ～イザヤ書 43 章 19 節～

I. はじめに

2019 年度末から続く新型コロナウイルス感染症は、今年度に入り鎮静化の兆しが見え始めました。しかしコロナ禍が生徒に与えた影響は大きく、心身の不調を訴える生徒が増加しています。生徒の心身の健康に今後も注意を払わなければならないことを強く思われる 1 年となりました。新たな対応が連続する毎日を教職員の協力によって、課題を残しつつも今年度末を迎えることができました。

今年度の生徒募集は一貫課程・高校入試ともに昨年度の生徒数を下回る結果となりました。入試広報部の総括をもとに次年度の生徒募集に力を注ぎたいと思います。また、今年度も財政的に厳しい状況が続いています。生徒募集と深く連動する財政健全化は女子中高にとって取組まなければならない最も大きな課題のひとつと考えています。本校の存続にも関係する重要事項として、対応可能な全ての方法を用いて財政再建に取組まなければなりません。

今年度は改革推進委員会を立ち上げ、スクールポリシー（3 ポリシー）をはじめ教育改革に関しての検討を行いました。次年度も継続して教育改革案について検討します。

2024 年度に就任する新校長が考える教育・学校運営が円滑に開始できる準備を行い、全教職員の招きに応じてくださった新校長をお迎えしたい。

II. 重点施策

(1) 21 世紀教育への取組み

- ・新しい時代に求められる知識の習得と学力の向上に努めました。
- ・「探究型授業、SDGs 教育、商品開発、GSlab」について取組みました。
- ・「イメージ教育、IB 教育関連」について取組みませんでした。

○探究型授業・PBL 学習は達成目標(授業内実施割合)を設けて実施しました。SDGs 教育は講演会などを通しての学習とポスターセッション等の発表の機会を用いての取組みができました。商品開発は 7 年の経験を活かし、地元企業と協力関係が少しずつ広がっています。教室内外での座学以外での知識の習得と学習を通じた学力の向上を継続していきます。

(2) 言語教育

- ・教科教育の枠を超えた学校生活全般での実践はできませんでした。
- ・キリスト教主義学校としての言語教育の実践に努めました。
- ・知識習得と心の教育を繋げる働きに努めました。

○中学から高校に至る全学年に置いている学年聖句を、特に新入生学年において年度の初めに深く学び、本校が大切にする「目に見えないものの大切さ」について今年度も伝えることができましたが、学校生活全般での具体的な実践には至りませんでした。

(3) キリスト教教育

- ・福音的聖書信仰に基づく教育の継承について取組みました。
- ・若い世代と共にあるキリスト教学校づくりに努めました。
- ・心の教育の中心的役割の継続と目に見える形の実践体験に取組みました。
- ・平和教育について取組みました。

○本校の教育の基盤であるキリスト教教育は、その中心を担う宗教主任が不在のため、きめ細かな運用と展開には至りませんでした。しかし、講堂礼拝に於いてのウクライナへの祈りと、ウ

クライナ国花ひまわりの校庭での栽培とチャリティー寄付運動を通して平和への思いを育みました。また教派教団にとらわれない福音的な教会から牧師を招いた礼拝と若い世代に人気の高い福音バンドグループ“ナイト de ライト”のミニライブを実施できました。このような活動を次年度も継続していきます。

(4) 女子教育

- ・21世紀社会のイノベーションを担う女性の育成に取組みました。
- ・新しい時代のリーダーの養成に取組みました。
- ・女子教育の研修と学び（探究型教育との関り）に取組みました。

○新しい時代のリーダーシップと女子教育に関して、教員研修会で、はこだて未来大学の美馬のゆり先生の講演を実施することができ、特に現在アメリカにおける女子教育の状況を教員が知る機会となりました。新しい時代のリーダーシップについて、生徒と保護者を対象として次年度に繋げていきます。

(5) 基礎学力の向上

- ・学ぶことの楽しさを体験する授業づくりにかかる研究実践について学校全体としての取組みはできませんでした。
- ・探究型授業に必要な学力が身につく授業を行うことについて学校全体としての取組みはできませんでした。

○基礎学力の向上は最も大切にすべき事柄ですが、コロナ禍による影響が残る今年度は学校全体として具体的に実践することはできませんでした。

(6) 財政健全化

- ・偏った支出削減ではなく、バランスを保ち教育活動に萎縮を招かない形の追求はできませんでした。
- ・入学生徒数増に繋がる教育改革と2030年度経常収支差額均衡の目標達成に取組みました。
- ・奨学金制度の有効活用の検討と実施に十分に取組みませんでした。

○本校にとって危急の課題である財政健全化に取組みました。入学者数は増加しましたが入寮生の減少、教員の病気休暇等による代替教員の採用は当初予想しなかった支出増の要因となりました。奨学金の支出削減が入学者数に影響を及ぼさない工夫を講じましたが、大きな効果は得られませんでした。今後もさらに奨学金総額削減に向けての努力を継続します。

Ⅲ. 21世紀教育への取組み

(1) グローバル教育(Cambridge English・リベラルアーツ教育・国際基準教育)

- ・探究型教育の実践、リベラルアーツ教育の研究に努めました。
- ・PBL型学習、SDGs教育、商品開発、GS1ab導入に取組みました。
- ・主体的な学習ができる生徒育成の研究を行うことはできませんでした。
- ・STEAM教育・IB教育を今年度は研究検討できませんでした。

(2) 総合学園としての研究・検討(英語・言語教育・芸術・イマージョン教育)

(3) リベラルアーツ教育実践(研究:STEAM・IB教育)

(4) アクティブラーニング教育(本校に相応しい形を求めて)

(5) インターナショナルスクールとの関係構築

(6) 将来の学校教育制度と役割(小中高大学校の枠組)、学び方、学校の在り方

- ・学園内教育のスケールメリットを用いた教育制度や学び方を研究できませんでした。

(7) 通信教育の研究

- ・今年度は研究検討できませんでした。

○教育研究部から積極的な実施内容の提案と研修がなされました。各教科・コースと多くの教員が実施目標を掲げPBL教育・7年目を迎えた商品開発・事前事後学習に力を入れたGS1ab等への取組みができました。次年度以降も継続することで主体的な学習ができる生徒の育成を目指します。インターナショナルスクールとの間で正式な検討はありませんが、年々インターナシ

ヨナルスクールからの問い合わせと在学生の本校受験が増加しています。本校との教育体制・教育方針の違いがあることを認識したうえで、慎重に対応しながら関係づくりを次年度に繋げていきます。

コロナ禍によって学習形態にかかわる問題が顕在化しました。学習方法、出欠席の扱いに関する課題がこれまでも増して大きく変化しています、キリスト教学園として前例にとらわれない学校学園の在り方を考えていくと同時に、学園内中等教育部門として将来の学校の在り方として、通信教育に関しての研究の必要性を感じています。

IV. 言語教育

言語教育は学校生活の基として心の教育・教科教育・学級運営・学校行事等、全ての教育活動領域に大きく関わり影響を与えると考えます。新しい時代の要請と教育の変化にあっても相応しい学校生活の指針として、またキリスト教主義学校として実践する本校の言語教育を創立の源である聖書に置きます。

[ヨハネによる福音書 1 章 1 節～5 節から]

初めに言があった：本校教育活動の基としての言語の在り方

言は神と共にあった：スミス先生を遣わし学校を造られた神(聖書)と共にある教育

万物は言によって成った：学校活動(授業・学級・課外活動・行事)で言葉が果たす役割を大切にする教育

言の内に命があった：生徒の人格(人権)を尊重し言(命)を大切にする教育。生徒が語り、生徒に語ることを大切にする教育。

(言の)命は人間を照らす光：生徒が神から愛され、他者を愛する生き方を知る教育

光は暗闇の中で輝いている：社会で生きる本校の生徒像 “Shine like stars in a dark world.”

暗闇は光を理解しなかった：困難・試練にあっても誠実に希望を持って生きる教育

- ・言葉と文字を通して自分と向き合い、他者への理解を深める機会を持つことはできませんでした。
- ・授業以外の場、ガイダンス、課外活動で用いる言葉の可能性を理解するための学びの機会は持てませんでした。

(1) 母語としての日本語教育の研究と実践

- ・全ての教育活動の土台となる母語としての日本語を研修実践できませんでした。
- ・グローバル教育に果たす母語の働きを研修し授業に活かせませんでした。

(2) 英語以外の外国語(例:中国語・韓国語・ロシア語・仏語・独語・西語)の導入検討

(3) 国内英語研修(長期・短期・国内)の検討

- ・留学を含む英語学習方法の多様性を検討することができました。
- ・国内留学(仮称)の実施に向けて検討することができました。

(4) 言語教育を土台とした人間教育、語学教育、理系教育

- ・英語科以外の生徒が英語(外国語)の楽しさを経験する授業を行うことはできませんでした。
- ・生徒が学び体験できる理系プログラムを研究できませんでした。

(5) 英語を含む多言語の習得を通しての異文化理解

(6) 国内留学(仮称)の検討(スミス寮の活用)

○コロナ禍 3 年目の今年度、これまでの留学形態を工夫した留学プログラムの提案と実践が専門英語科からあり、留学希望生徒・保護者のニーズに一定程度以上に応えることができました。コロナ禍による影響のため、留学を敬遠する生徒・保護者に対してこれまで以上に工夫した対応が求められる中、北星学園短期大学部との連携プログラムを行い、学園内交流活動としても良いものとなりました。また、探究型授業を実践する中で、必要な学力について考える機会が授業を通して生徒に提供され始めています。母語としての日本語教育の研究と実践に関して具体的な実践はできませんでした。

V. 大学との共同研究(英語・国語・他)

(1) 英語教育・言語教育

総合学園としてのメリットを活用して、これまでの中等教育、高等教育の枠組みを超えたプログラムの研究検討を行うことはできませんでした。

(2) リベラルアーツ教育

中等教育での探究型授業・PBL 学習・SDGs 教育を経験した生徒の学びの継続と学園で学ぶ生徒が学びの楽しさを知り、自ら学習する力を身に着ける教育連携を検討できませんでした。

(3) イマージョン教育

(4) IB 教育(PYP 教育・MYP 教育・DP 教育)

総合学園として北星学園が育てる真の国際人育成を念頭に中期計画に取入れ研究できませんでした。

○具体的な検討・展開する機会を持つことができませんでした。

VI. 部活動

(1) 新しい教育と部活動・生徒募集活動と部活動の関わり

- ・部活動と学習の両立を希望する小中学生への働きかけを行うことはできませんでした。
- ・総合学園として部活動連携の可能性を検討できませんでした。

(2) 学校規模に見合う部活動の整備

- ・外部コーチ(校外実技指導者)の導入を検討できませんでした。

○部活指導の放課後・休日指導は働き方改革の大きな課題のひとつでもあり、将来の部活動の在り方に関して検討を急がなければなりません。直接、生徒募集に係る部分でもありますので、慎重に検討を続けます。中学高校の部活動は中等教育部門のみの問題ではなく、学園全体の課題としても検討が必要な時期にあります。学園の発展のために生徒学生募集に有効なあらゆる要素を総合的に考えなければなりません。スポーツ奨学金資格を有して入学した生徒の学校生活全般に注意を払い、関わる教員間で情報を共有し育てることに留意が必要な一年でした。

VII. 生徒募集

◎入試

- ・入試全般(日程・科目数・内容・他)について検討できませんでした。
- ・学校イメージの改善や組織の改編について検討できませんでした。
- ・2022 年度入試結果分析に着手しました。

○新入生アンケートを実施し本校を受験し入学した生徒の流れと動きを調査しました。説明会参加動向・受験傾向を検討し、新型コロナウイルス感染症の感染状況に留意しながら、昨年同様の企画に今年度は広報部生徒の働きを加えて丁寧に実施しました。この流れを次年度以降も行います。今年度は推薦・一般入学試験以外に転入試・編入試・特別入試受験者が例年になく多い年となりました。コロナ禍によって中学高校段階での転入転出がこれまでになく多くなっています。今後も継続されるこれらの傾向への準備と対応が必要です。

◎広報

- ・本校の認知度を高める方法の調査研究はできませんでした。
- ・全教職員が生徒募集の目線を持った教育活動(教科・学級運営・行事・放課後活動)を共有し、安心安全な学習環境を提供していること、本校が継続する教育活動(商品開発・SDGs 教育・GS1ab・スタディツアー他)に探究型授業、PBL 教育への取組みなど、総合的な学びを実践する学校であることを広く告知することについて、十分に行うことができませんでした。
- ・SNS 等デジタル広報媒体の有効活用研究に取り組みました。
- ・オープンキャンパス(小学生対象)を開催することができました。
- ・広報研究部(在校生)参加による学校説明会を行うことができました。
- ・小中学校、学習塾訪問体制を強化できませんでした。
- ・Web 出願を実施できませんでした。

○今年度も SNS 等デジタル広報媒体を活用した広報活動を継続しました。入学後の生徒アンケートにより、広報の手段として良い傾向が出ています。今後も工夫を継続していきますが、担当者が偏らない工夫が必要です。

今年度も地方回りや学校周りを入試広報の教員を中心に行うことができました。次年度は時期と内容を検討し体制を工夫したいと考えます。

(1) 札幌石狩圏以外の女子児童・女子生徒募集(スミス寮の活用)

- ・コロナ禍によって実施できなかった石狩圏外の小中学生保護者への校地内寮の告知に取り組みました。

(2) 留学生(アジア地域)の積極的な誘致

(3) 北海道の 12 才、15 才人口減少(少子化の影響の拡大)への対策

(4) 国内以外からの受験生発掘と生徒募集

(5) クリスマン人口が増加するアジア地域のミッションスクールとのネットワーク構築

(6) 国際基準の教育実施

(7) その他

- ・今年度から制服正装にスラックスを加えることができました。
- ・学校アンケート結果を有効活用し、学校への期待に応える学校づくりを十分に行うことはできませんでしたが、一部活かすことができました。
- ・生徒指導、保護者対応研修を実施できませんでした。

○地方回りの効果とコロナ禍の鎮静化傾向の影響もあり、スミス寮入寮者数が増加しました。今年度は海外(韓国・米国・独・他)やインターナショナルスクールからの受験、転編入学への問い合わせがこれまでになく多く、実際に受験に至った生徒もいました。次年度以降も今年度の経験を生かし、海外からの受験問い合わせの対応に備えます。道内外アジア地区への受験生発掘は行えませんでした。

VIII. マネジメント改革

(1) 役割担当と権限の明確化

- ・2024 年度学校運営体制(2024 年度新校長就任)への準備を行うことができました。
- ・管理職体制整備(2021 度から教頭 3 名体制実施・副校長職の研究検討)できませんでした。
- ・教育改革に対応する学校運営マネジメント体制の整備と強化を行うことはできませんでした。
- ・学級担任の役割と働きの研修を行うことはできませんでした。
- ・校内分掌の働きと役割を整備できませんでした。

(2) 評価委員会

第三者委員会の在り方を検討し設置することはできませんでした。

○2024 年度就任する新校長の教育方針を加えたスクールポリシー策定を行うことが出来ました。毎年校長もしくは教頭の選挙を実施しなければならない現行の管理職選出制度を、検証する必要があると感じています。学級担任の働きと役割についての研修、第三者委員会を設置することはできませんでした。

IX. 北星ブランドの構築と運用

(1) 教員人事採用

- ・担任研修(学級運営・保護者対応)を実施できませんでした。
- ・初任者研修、中堅教員研修(キリスト教学校教育同盟・私立中高協会等)に出席できませんでした。
- ・新しい時代の教育に相応しい教員採用(複数教科教員免許・他)できませんでした。
- ・人事委員会の主導により本校教育に相応しい教員の採用することができました。

(2) その他

- ・2025 グランドデザイン(教育改革第Ⅱ期)改革案策定のための小委員会を設置できました。
- ・働き方改革にかかり、労働者過半数代表者と検討して変形労働時間制導入等、学園との調整を行いつつ働きやすい職場づくりに励みます。また、労働環境を改善し、社会から評価される学校づくりを行うことはできませんでした。

○今年度、教育改革推進委員会では集中討議を含め 25 回以上の検討協議をしました。その中間報告を2回教員会議で行いました。次年度は検討母体を改善して検討を継続し、2025 年度実施案を策定しなければなりません。

今年度、労働者過半数代表者と働き方改革全般、特に出退勤管理・変形労働制に関して5回にわたり検討協議の機会を持ちました。課題の中には女子中高単独で実施できない内容もあり、学園とも連携しながらより良い労働環境作りを目指します。

X. 校地資産活用

(1) 南四条校地活用

札幌市中心部に位置する学校として地域に開かれた活用を学園と検討できませんでした。

(2) 盤溪校地の活用

学園規模で検討できませんでした。

○検討できませんでした。

XI. 財務運営方針

(1) 財政運営目標設定

- ・2030 年度経常収支差額均衡の目標達成に取り組みました。

○今年度補正予算は、入学者が一貫・高入とも増加したため収入が増加しましたが、人件費(休職代替)、光熱費急騰などにより支出も増加したため支出超過となりました。今年度奨学金を、支給方法の変更等による削減を実施しましたが、更に削減していかなければなりません。同時に今年度の人件費比率が 79.7%(全国平均約 65%)であることを教職員が認識しておく必要があります。

財政の健全化は教職員の協力なしでは実施できません。奨学金は本校の生徒募集と深く関係しているため、募集定員充足を目指しながら削減の工夫を行なう、難しいかじ取りを続けて、一人でも多くの入学生獲得のために力を尽くさなければなりません。

(2) 財政計画立案

- ・経常収支差額均衡を図るべく財政計画の立案に取り組みました。

以 上